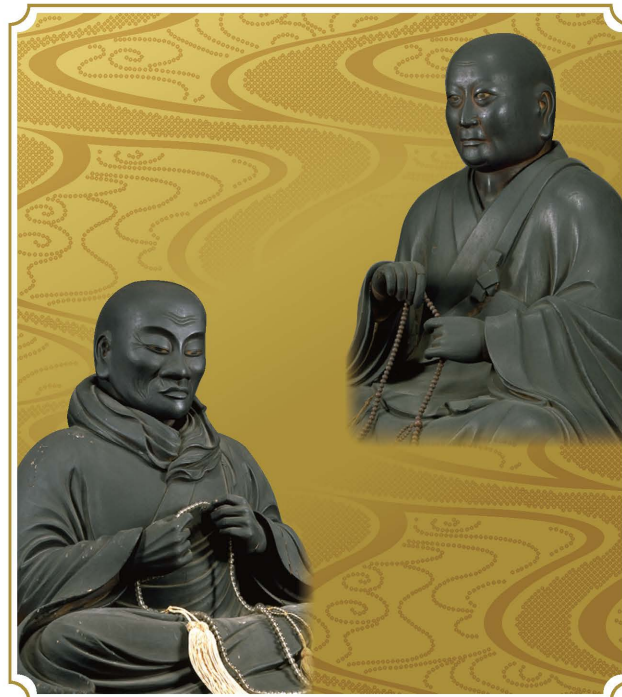


き
よ
う
さん
ほ
う
え

な
お
し
は

八



親鸞聖人と法然上人(右上)

撮影:藤森 武



本山佛光寺

〒600-8084 京都市下京区新開町 397
Tel.075-341-3321 / Fax.075-341-3120

<http://www.bukkoji.or.jp/>

慶 讚 法 会 基 本 理 念

大悲に生きる人とあう
願いに生きる人となる

2023年(令和5年)、本山佛光寺は、慶讚法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能(AI)をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出会いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

人となる

本山佛光寺

「ご主人を亡くされたAさん。諸事情により、住み慣れた地を離れ、別の街へと引っ越されたのでした。」

ただ、新天地での生活は、周りにほとんど知り合いがいない毎日。不安と寂しさから一時期体調を崩されたのでした。そして口癖のように「主人が亡くなったせい、こんなにも寂しい思いをしないといけない」と亡きご主人を責めておられたのです。

毎日、不満を口にされていたAさんでしたが、ご縁があつて、お寺の法話会に足を運んでくださるようになり、教えの場に身をおかれたのでした。

そんなAさんが数年後におっしゃった言葉に驚かされました。「たまたま法話会のお誘いを受けて教えに耳を傾けるきっかけをいただき、周りの皆さんとお念仏をともに申す仲間となりました。主人が亡くなったからこそ、このようなご縁がいただけたのですね」

悲しみが続く中であってもそつおっしゃったのでした。

◎ 教えの場に身をおく

親しい方を亡くすといついつと悲しい出来事は、誰もが経験したくないことです。が、現実の問題として目の前に立ちほだかることも事実です。

しかしAさんは、それをも一つの縁と

していただかれていったのでした。

教えに遇ったからといつても現実が都合のいいように変わることはありません。現実は変わらなくとも、その現実を受け止める眼が変わってくるのです。

「主人が亡くなったせい、」から「主人が亡くなったから、こそ」と。

また、ごつもおっしゃいました。「今まで主人を責めてばかりで、悪いことすべてを主人のせいにしていました。何とも恥ずかしいことです」

生前は、そばにいらつしやるのが当たり前だったご主人。そのご主人を亡くされたことによつて、その日常がかけがえのないことだったと気づかされただけでなく、教えの場に身をおかれ、ご主人ともう一度出遇うことができたのでした。

◎ 人となる歩み

たまたまの出遇いが、教えの場に身をおき、教えにふれるきっかけとなり、ともにお念仏を申す人へと育てられていくのでしよう。

Aさんはまさに今、亡きご主人をご縁とし、阿弥陀さまの願いに生きる「人となる」歩みをはじめたのでした。